

# 日本自動車史の資料的研究（第18報） 東宮殿下御成婚の奉祝献納自動車（第4報）についての補稿

大 須 賀 和 美

## 1. 初 め に

日本自動車史上最初に輸入された自動車として、明治33年(1900)の東宮殿下（後の大正天皇）の結婚式を祝し、アメリカ・カリフォルニア州在住の日本人会が三千ドルの據金で献納したとされる電気自動車が従来の自動車史で取り上げられ、中にはこれを疑問視する声もあったが、小生の研究（本学論叢第10号、1980、第4報）にて宮内庁の東宮日記及び当時の東京日日新聞記事にて事実が裏付けられ、間違いなきことが確認された。

その後、日本交通史研究家文学博士 齊藤俊彦氏（神奈川県藤沢市）の研究により、明治31年(1898)3月、フランス商人によりパナール車（Panhard & Levassor）が東京へ持ち込まれ、市内を試走の上競売に付されたが不成立、国外へ持ち去られた史実が当時の新聞紙上で確認でき、この献納車が日本最初の自動車ではないことが分った。

しかし、この献納車については実際に使用されなかったためか国内資料が乏しく、特に献納側の在アメリカ邦人の事情が遠く海外のため調査の機会がなく、また、ほとんどの海外日系新聞を収集されている国立国会図書館でも1900年ごろの該当紙は漏れており、次のような要点があいまいなまま今日まで経過した。

- ①当時として大金の三千ドルを、貧乏な在米邦人がどのようにして據出したか？ 三千ドルは正しいか？
- ②献納の時期は？ いつ日本へ着いたか？
- ③電気自動車といわれるが正しいか？ メーカーは？

これらの疑問を解明できる機会が今回偶然にも到来した。東京の大手出版社である集英社の自動車専門ライターである中部 博氏が、前出齊藤氏のパナール車や小生の献納車についての論文に着目、ノンフィクション「自動車伝来物語」の編集を企画され、真実を追ってヨーロッパやアメリカの現地資料調査を行った。

91年2月、約3週間パナール車関係の調査をパリなどで済ませ、一端帰国の上同年3月、献納車の調査にサンフランシスコへ向い、こちらも約3週間の滞在で一応の成果を得て帰国された。このアメリカへの出発直前に小生と調査打ち合せを行ったとき、現地の日系新聞の発掘を強く進

言しておいたかきがあり、苦心してこれを発掘調査の上関係紙面のコピーを持ち帰り、その提供を受けた。

1900年当時のサンフランシスコには、日系新聞として日刊の「日米新聞, Japanese and American News」と「新世界, New world」の二紙があったが、1907年(明治39)5月18日早朝の大地震で周辺とともに日本人街も全滅、その時以前の新聞は現在どこにも保存されていないとのことであった。サンフランシスコの調査をあきらめロスアンゼルスへ行かれた中部氏は、そこで同市の公立図書館協会が発行した日系新聞雑誌のマイクロ・フィルム目録を入手、そのリスト中に前出「新世界」の1899年10月28日から1900年12月末日までの版が近郊のガーデナ公立図書館(Gardena Public Library)に保存されているのを知った。ガーデナ市はロスアンゼルス空港から自動車で約1時間南方の、日系人の多い街といわれる。

ここに中部氏が苦心して発掘された資料をもとに、献納車の当時の事情を詳細に確認し、12年前の同献納車に関する小生の研究を補足したいと思う。この資料は、(株)集英社の発行する週刊誌に本年6月から「自動車伝来物語」として文・中部 博氏で12回連載された中にも発表され、一部重複する点があるが、自動車史の観点で見直したものである。

## 2. 日刊新聞「新世界」の献納車に関する記事

日付を追って、関係記事の概要と推移をまとめることとする。

1900年2月14日 ●御成婚の御発表

皇太子殿下には九條公爵の第四女節子姫と  
御結婚相成べき旨二月十一日を以て公然御  
発表に相成候趣き本日外務大臣より電報有  
之候に付不取敢右御通報申進候敬白

二月十三日

在華府

特命全權公使 小村壽太郎

在桑港

領事伯爵陸奥廣吉殿

陸奥領事は保養のためロスアンゼルス地方に滞留中、この電文のためか急遽帰館され、結婚式は4月3日ごろではないかと報じている。

4月3日 ●公使の赴任

駐米公使小村壽太郎は駐露公使に転出、4月18日にワシントンを出発予定である。

●皇太子殿下御慶事奉祝献品に関する注意

東宮殿下御慶事につき、全国臣民中奉祝の誠意を表さんがため宮内省へ伺い出る者が多いが、右につき本月九日宮内次官より各地方次官に次の意味の注意書を発した。（抜すい）

- 一 全く特志者の赤誠より出づるものは特に御受納可相成内議に候
- 一 名聞又は廣告的の献納品は御主意に相戻り可申候
- 一 飲食品等の如き一時に消耗すべきものは可成差扣られ度候

4月5日 ●皇室御慶事に就て居留民奉祝の意

近着の新聞によれば、結婚式は5月初旬とのうわさなれば、在米日本人からも何か奉祝の意を表しなくてはと、両新聞社の社員は今日陸奥領事を訪問して、領事の意見を聞くはずなり。

4月6日 ●御慶事奉祝に就きて

領事は近日中に重立ちたる人々の意見を聞き官民一致して奉祝の準備をしたい旨述べられた。

4月11日 ●御慶事奉祝に就きて

その後領事より在留有力者に相談あり、正金銀行、東洋汽船会社、三井物産会社等の諸氏と謀り、日時も迫っているので13日に在留有力者と会合を持ち、寄附金募集などの打ち合せをしたく、各団体へ通達するはずである。

4月13日 ●慶事奉祝の相談会

陸奥領事を始め銀行、汽船会社、物産会社等の諸氏主唱者となりてその相談会を今日午後八時より催すこととなった。

●皇太子殿下御慶事奉祝献納品意匠募集（広告）

4月14日 ●御慶事奉祝の相談会

陸奥伯爵、正金銀行、東洋汽船会社、三井物産会社の諸氏発起人となり、昨日午後八時各団体の有力者二十七人がサクラメント街にて会合し、次のことを議決した。

- 一 本会を加州御慶事奉祝会と称す
- 一 本会は御慶事に対し献納品を為し併せて其祝会を桑港に行ふ
- 一 右に就き当国在留帝国臣民に向って普く寄附金を募集する事
- 一 本会は左の役員を設く

会長 一名、理事 七名、委員 七十名

- 一 献納品其他祝会に関する方法等は会長及び理事に一任す
- 一 委員撰択は理事之を推撰す

次いで役員選挙に移り、次の諸氏を指名せり

会長 伯爵 陸奥廣吉

理事 井坂孝氏、飯島捨一郎氏、戸澤鼎氏、小田柿捨次郎氏、  
長澤鼎氏、黒澤格三郎氏、安孫子久太郎氏

同夜陸奥伯は病気のため出席していなかった。

●慶事に就き献納金申込所と締切り期

御慶事奉祝会は今日より献納金募集に着手し、その申込所を次の四ヶ所に確定し、その締切り期限を五月十日までとした。

- 桑港 帝国領事館
- 桑港 正金銀行支店
- 新世界新聞社
- 日米新聞社

●奉祝寄金の区域

加州全体の同胞に向ってあまねく募集に着手する予定

- 4月19日 ●広告(写真-1, 参照)
- 4月26日 ●広告(写真-1 と同文)
- 4月30日 ●御結婚式の御日取り確定す

奉祝会会長陸奥伯から御結婚式の日取を電報にて伺いしに、五月十日と決定したと返電があったとのこと。

●奉祝会委員と其運動

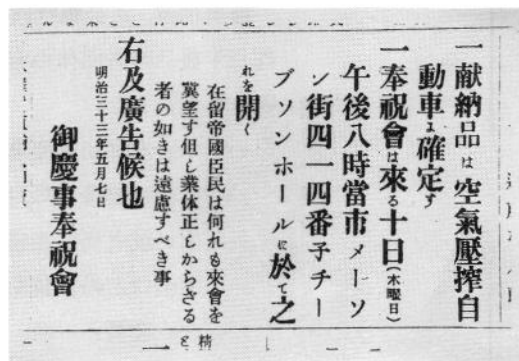
市内委員 三十五名(指名記載あるも略)

地方委員 三十五名( " )

- 5月2日 ●広告(写真-1 と同じ)
- 5月3日 ●広告(写真-1 と同じ)



(写真-1)「新世界」1900年4月19日付



(写真-2)「新世界」1900年5月8日付

●御慶事奉祝会の相談会

昨夜午後八時半ごろより旧領事館内に会長理事を合せて二十七名来集、奉祝の方法につき物品を献納する説、学校病院を記念に設立する説、便役なる記念物を築造する説に分れているが、日時もないことから献品に決定し、その意匠確定のため明日ごろまた会議を行うこととし十一時半ごろ散会した。

5月5日 ●奉祝献納資金

締め切りは広告には十日限りとあるが、理事会は遅くとも八日までに献納品目録及び金額名簿を調製し、電報で献納目録を宮内省へ届け出る予定で、八日発の電報はおよそ八時間を要して日本に着するから、日本は九日に相当するはず。

5月7日 ●御慶事奉祝会寄贈金 第二回報告（広告）

（206人，各人50仙～5弗，氏名記載あるも略）

諸口総計 金九百〇八弗五十仙

5月8日 ●御慶事奉祝献上品の決定と奉祝会

献上品は空気圧搾自動車かピアノの二品の内から選定するはずであったが、自動車に決定した。満足すべき自動車の価額は二千五百弗以上三千弗のもので、募金の額によってその金額を決めたいが、三・四千弗は集まるようだ。また、奉祝会は来る十日（木曜日）午後八時より桑港メーソン街四一四番ネチーブソンス会館に挙行される。

●広告（写真-2，参照）

5月9日 ●広告（写真-2と同じ）

5月11日 ●御慶事奉祝会の模様

予報のごとく昨日午後八時よりメーソン街ネチーブソンス大会堂において開かれ、来会総数一千三百八十八人と桑港日本人会あって以来の大会となり、奉祝会長陸奥廣吉伯爵の開会の辞、祝辞、余興などで十一時に散会した。

5月14日 ●御慶事奉祝会寄贈金 第三回報告

（89人，25仙～5弗，氏名記載あるも略）

5月15日 ●奉祝資金高

各委員からの報告が終っていないので確かな額は判らないが四千弗ぐらいにはなるのでないか。従って献納品の額は三千弗ぐらいは支出でき、宮内省へ奉送するについて奉送代海上保険などで諸雑費も一千弗ぐらいは必要と思はれる。

5月23日 ●御慶事奉祝会寄贈金 第四回報告  
 (228人, 25仙~5弗, 氏名記載あるも略)

7月5日 ●御慶事奉祝理事会よりの廣告

かねて同会から東部に向け特別注文の空気圧搾自動車は、製造元にて非常に日時を要し、献納に対して時機を失するおそれがあるので、やむなく出来上りおる最上等のものを買い上げることとなり、また献納資金も予定より多く千二百弗余の残余金が生じたので、その処分について討議中である。

奉祝資金総収入合計五千三百十一弗十五仙中より献納自動車代価、運賃、保険料、奉祝会費其他一切の支出を控除し、なお残金約一千二百弗を生ずる予算で、残金処分に関し次の二案がある。

(甲) 更にピアノ一台を購入して献納したいが、出願の期限に後れていたら、東京市の奉祝美術館新設費中に寄附する。

(乙) 在加州本邦民の福利を増進するを目的とする協議会の基本金中へこれを寄附する。

8月2日 ●廣告(写真-3, 参照)

●奉祝献納品の着柔

本紙廣告にあるとおり、御慶事奉祝献納品空気圧搾自動車は当地に着し、明日の亜米利加丸にて宮内省へ献納のため奉送するはずである。

8月23日 ●御慶事奉祝会の決算

のを清す我々更にも官職し  
 兼て及廣告置候献納品自動車の義鑓きに井購求  
 方在及廣市同正今般買カ丸を了  
 産會社支店長へ及依出帆船所メリカ丸を了  
 以て發送の三日當有之候に本邦當奉祝會メリカ丸を了  
 内大臣へ申上候分は上納着方取計可申等  
 托有之候此段及廣告候也  
 明治三十三年八月一日  
**御慶事奉祝會**  
**廣告**  
 五十弗  
 三弗  
 二弗  
 五十三弗

(写真-3)「新世界」1900年8月2日付

予定によれば昨日あたり献納品空気圧縮自動車は着浜のはずにて、近日中に献納品奉納の手続きを終るはずである。慶事奉祝会の決算報告も完成し、残余金は協議会の基本金として引渡されるだろう。

以上が新聞記事中の経過概要で、雑なものは省略した。東洋汽船アメリカ丸の横浜入港は予定どおり8月22日で、翌日香港に向って出港していることは横浜貿易新報の当日版で確認できた。また、前第4報の東宮日記中にある“5月ごろムツ氏から自動車献納の電報を受け取った”との記録は、5月8日発信されたとの献納目録電報と符合する。

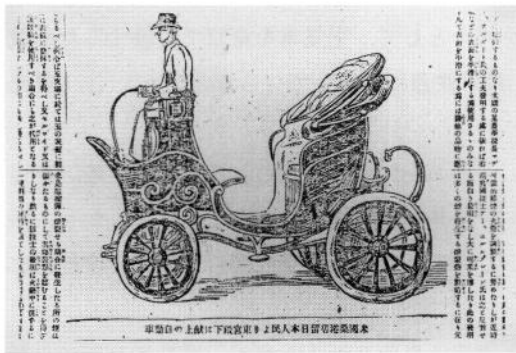
なお、奉祝会寄贈金5千弗余については、第一回報告が紙面には見当らなかったが、25仙～5弗までの小口が大多数で大口献金者の名は掲載されていない。募集の末端は各出身県人会などが運動し、日雇人夫から学生まで強制的に徴収されたと投書欄にあった。ちなみに、大根畑の日雇農夫の日当が一弗二十五仙と広告されていた時代である。

献納自動車は最後まで“空気圧搾自動車”として扱われているが、東部で既製品を購入した時点で車種が“電気自動車”に変わったことは、新聞記者もまだ知らなかったのだろう。もちろん、東部で梱包されたまま桑港へ鉄道便で送られ、開梱確認することなくそのまま船積みされていったものと思う。

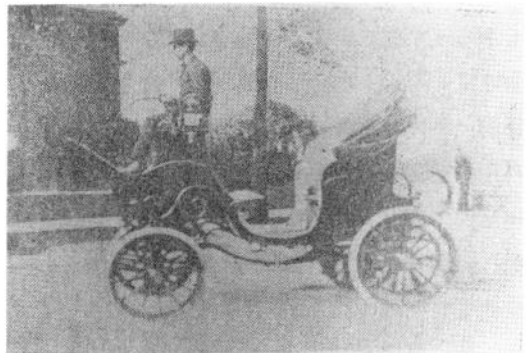
### 3. 献納自動車の車種は？

本件について考える資料は、明治33年9月8日付の東京日日新聞紙上のスケッチ（写真-4）と、「明治事物起原（下巻）、石井研堂著、昭和19年12月春陽堂発行」にシカゴで撮したという写真（写真-5）が掲載されているのみで、他に何も残っていない。写真とスケッチは較べて見れば同一のものであることが分り、献納車に付けて写真も送られ、新聞の写真印刷が未発達な時代、専門家にスケッチさせたものと思う。

前第4報にて小生がこの車種につき、当時アメリカで多く市販されていた“ウッズ式電気自動



(写真-4)「東京日日新聞」明治33年9月8日付



(写真-5)「明治事物起原」



(写真-6)「WHEELS ACROSS AMERICA」から  
が、推定でなく裏付けられたと考え、佐々木氏の努力に感謝する。

車”でないかと推定しておいたが、最近自動車史研究家 佐々木烈氏(船橋市)が、東京の図書館で発掘したという同型車の写真コピー(写真-6)の提供を受けた。この写真は乗客二人乗りのピクトリヤ型、1901年式ウッズ電気自動車で、外観・構造は献納車と同一である。ただ献納車は、後部座席に対面の二人乗り補助席(侍女、侍従用)を設けているため、ホイール・ベースが長くなっているのみの違いである。

これらの資料により、献納車はウッズ電気自動車(Woods Electric car)であったこと

#### 4. 空気圧搾自動車とは?

献納車として当初話題になった“空気圧搾自動車”とは、現在までその実体を見ることもなかった幻の自動車の感があるが、どんな構造であったか考えて見ることとする。

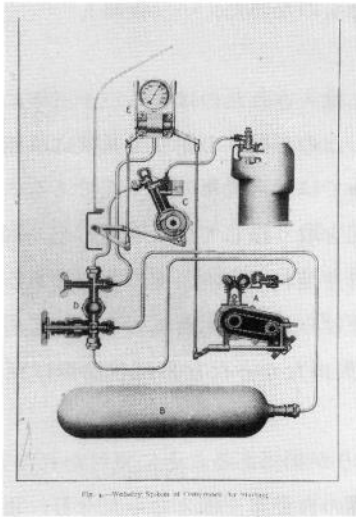
自動車の開発期であった1900年ごろでは、その原動力機のエネルギー源としては、蒸気、電気、炭化水素系気体燃料(アセチレン、天然ガスなど)、石油系液体燃料(ナフサ、ガソリンなど)、圧縮空気などが種々試作されていて、空気圧搾自動車もその一つであった。

明治32年(1899)はじめ東京市の馬車鉄道会社は、米国人の売り込みにより近代化を電気式鉄道にするか、空気圧搾鉄道にするか迷った上調査に技師をニューヨークへ派遣したことがある。その技師の途中報告によれば、当時既にニューヨーク市では、市内鉄道用に1万5千馬力の空気圧搾機を設え付けた空気圧搾所と空気起動機付客車が竣工しており、資本金700万弗の会社が設立されて開業寸前であり、他方郊外荷馬車及びオムニバス代用の空気車製造目的のアウトモビル会社もあるとのことである。馬車鉄道会社は米国商人を仲介として、空気車を東京で実験するため数台注文したが、なぜか商談が途中立ち消えとなり、電気鉄道に決定していったという。(注;読売新聞、時事新報記事から)

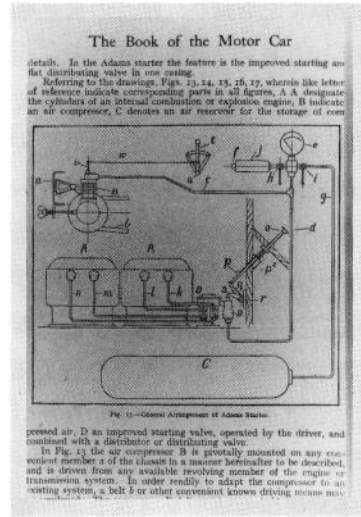
圧搾空気式自動車は大きなボンベを必要とし、一回の充てん量が限られるため長距離、高速運転ができないなどの欠点が考えられ、他式に較べ今一步開発が後れていたようだ。しかし、振動、騒音が少なく、排気ガスのいやなおいもないなどの特徴から、完成間近の情報で宮廷用に推薦されたのではないかと推察される。

圧搾空気式エンジンは自動車の原動力機としての応用は失敗したようだが、補助的な面で自動車に応用された実績があるのでここに紹介し、その原理を推察していただきたい。1900年代の





(写真-7)



(写真-8)

始め、レシプロ・エンジンのスタータとして、現行のような電気モータ式スタータと今一つ圧搾空気式スタータが発明されており、イギリス車のマニュアルから、次の二式を転載紹介する。

1. ウーズレー (Wolseley) 式圧縮空気スタータ (写真-7)

A : single stage air compressor pump, driven by engine.

B : reservoir (max 300 lb/inch<sup>2</sup>)

(注)約10マイル走行で300 lbまで充てんでき、最低100 lb 必要、スタータ圧60 lb。

C : distributor

D : Valve and junction box

E : dash-board control mechanism

2. アダムス (Adams) 式圧縮空気スタータ (写真-8)

A A : engine

B : air compressor

C : air reservoir

D : starting valve

5. 後 書 き

前第4報（1980年）以後の調査で、献納車に関する日本の新聞記事が2点あったので、下記記録しておく。

明治34年7月9日（国民新聞）

自動車の話（一）…（前略）…、しかしまだご乗用にならぬようだが東宮の御所には一台頗る立派なのが揃ってあるので、それは昨年御大婚の節、桑港在留の日本人が據金して三千

弗を以て之を購ひ、猷芹の微意を表する為に奉ったものなのだ、…（後略）。

明治44年10月8日（時事新報）

東京の自動車界 ▲東宮猷納が嘯矢 自動車が日本に輸入されたのは去る三十三年に米国在留民団から御慶事紀念として遙々東宮御所に猷納したのが抑々の始りで其頃には無論日本には未だ自動車を動かす者が無かったので東宮御所では其自動車の電気式であるのを見て村井某と言う電気技師をして扱はした処マンマと舵を取り損じて御所附近の紀ノ国坂下の堀の中へ自動車を飛び込ませたので御所では大に驚き是れは危険至極のものであると某儘車室内へ納めて仕舞ひ果は全く無用とあつて拂い下げられ今は何所に何うなつて居るか影も形も分らなくなつたさうである此時此様云う過失がなかつたならば自動車は東京でも最つと早く發達したかも知れない。

最近、日本の自動車史として俗説となっているものに誤りが相当あることに気付かれた方々が、いろいろ事實確認の研究をされるようになってきた。世界の自動車王国となつた今日、正しい日本自動車史が後輩たちに引き継がれることを願つてやみません。

以上

〔追記〕

前出中部 博氏は、週刊紙に連載執筆後も本件に関し、陸奥廣吉伯爵や荷負人と目される古川潤吉の後えいを探し、人脈による調査をされていたが、今回陸奥廣吉の子息陸奥陽之助氏(83才、(写真-9)



インタナショナル映画会社社長、現職）とお逢いすることができ、その下記蔵書中から献納車の鮮明な写真（写真－9）を発見した旨報告を受け、早速上京の上その資料を確認したので、ここに追加発表するものである。

（出版物） 書名「古川潤吉君伝」（非売品） 大正15年12月12日発行  
発行者 東京市麴町区八重洲1丁目1番地 古河合名会社内  
五日会  
右代表 昆田文次郎

この書中で確認された事項は、次のとおりである。

- （1）古川潤吉は、陸奥伯爵家から古川市兵衛（足尾銅山等で有名な古川鉷業の創設者）のところに明治16年、14才にして養子に行かれた方で、廣吉の1才下の実弟である。
- （2）廣吉伯爵は、機械に理解ある実弟を献納車の荷負人として、献納手続きの代行を依頼した。
- （3）古川潤吉は着荷後、その組立、試運転を諸機械輸入業の高田商会に命じた。
- （4）献納車写真（写真－9参照）

陸奥廣吉伯爵がこの伝記の編集に資料を提供されたと記述してあることから、この写真も伯爵の手元にあったものではないかと思われる。昭和19年発行の「明治事物起源」（石井研堂）にある写真のもとになったものだろう。